

情報、命題、モデル、観念

榎本啄杜（京都大学）

情報の哲学においては、「情報」を多義的な概念とみなしたうえで、適切な抽象化レベルに応じた概念の整理が行われている。たとえば、通信理論の分野で伝送されているのは多義的な情報の中でも「データ」に分類でき、我々が日常的に用いている「意味論的情報」とは異なるものとして扱われる。このような見方を採用するとき、通信理論において一般に使用される「情報量」とはデータに関する情報量のことであり、たいていは意味論的情報についての情報量ではない。

意味論的情報の情報量を測定することができるかどうかは、情報の哲学におけるオープンプロブレムのうちの一つである。意味論的情報については情報量など考えることはできないと主張する論者がいる一方で、バーヒレルやカルナップ、そしてフロリディらはこの問題に対して肯定的に考えている。その中でも特にフロリディは現代における旗振り役であり、「強い意味論的情報理論」と呼ばれる独自の情報量理論を構築している。

フロリディの戦略をいくつかのポイントに分けて概観すると、以下ようになる。まず、意味論的情報を命題の部分集合とみなすことで、真理値をもつものだけにターゲットを絞る。次に、そのうち真であるものだけが意味論的情報と呼ばれるべきものだとして主張する。この考え方は「真理性テーゼ」と呼ばれる。そして、真理値とその他特定の性質に基づいて、その意味論的情報の情報量が計算される。

しかし一方で、フロリディが意味論的情報を「対象のモデル」だと想定して説明を行っている箇所が随所に見受けられる。そこで重視されるのは、意味論的情報が、どの程度対象を上手くモデリングできているかということである。すると、意味論的情報を考えるうえでは、「真理値」でも「真であること」でもなく、「類似性 (similarity)」ではないかという疑問が浮かぶ。対象との類似性と言えば「観念 (idea)」に関する古典的な問題にも繋がるが、一説では「information」と「idea」は語源を同じくする関連概念である。

本発表では、意味論的情報の情報量理論を精緻化するプロジェクトの前奏として、「情報」「命題」「モデル」「観念」といった関連概念群を、真理値と類似性の観点から整理することを試みる。従来論争では真理性テーゼ、つまり「真であること」を条件として求めるか、それとも「偽であってもよい」と条件を緩和するかという点で対立しており、いずれにしても真理値が争点となっていた。本発表を通じて真理値から距離を置いて情報を考えることに成功すれば、先行研究よりも首尾よく、情報をモデルとして捉えられるようになるだろう。

ウィトゲンシュタインの「神話体系」——フロイト批判の解釈を手掛かりに

木本蒼（京都大学）

本発表の目的は、ウィトゲンシュタインにおける「神話」概念の分析を通じて、後期思想で批判される哲学的な疑似問題が発生する構造は、実は、言語自身の特徴であるという言語観を彼の思想に帰することである。

後期ウィトゲンシュタインは、言語使用の誤りによって生じた哲学の疑似問題を、正しい言語使用へと連れ戻そうとする。彼の「神話」概念は、大半の先行研究において、この誤った言語使用を指す言葉として理解されている。しかし彼はある箇所で「神話体系が言語の底に打ち据えられている」（「フレーザー『金枝篇』について」と述べている。このアフォリズムは、「神話」が通常の言語使用から逸脱した状態ではなくて、むしろ言語の中心に位置するというを示唆する。

以上のように「神話」概念は、一方で先行研究が示すように否定的に用いられるが、他方、いくつかのアフォリズムでは言語自身を規定しているという肯定的用法が看取される。この両義性は、彼の言語観を理解する上で示唆的である。というのも、「神話」とは彼が格闘する疑似問題（哲学的な「病」）の呼称でもあって、「神話」概念の両義性はそのまま「病」の有する両義性の洞察につながるからである。このようにして、「病」は治療されるべきものであると同時に、言語自身の特徴であるというウィトゲンシュタイン解釈が浮上する。

さて、以上の目的のために本発表では、ウィトゲンシュタインのフロイト批判に着目する。彼は「フロイトがしたことは新たな神話の提議だったのだ」（「フロイトについての会話」と言う。ブーヴレスは「神話」をフロイト理論に対する否定的な批判を集約した言葉として解釈する（『ウィトゲンシュタインからフロイトへ』）。

しかし、フロイトに対するウィトゲンシュタインの議論を追うと、彼の態度が否定かつ肯定の両義性を持つことが浮き彫りになる。発表ではここからフロイト批判で登場する「神話」という用語が、実は、たんに言語使用の混乱を指摘する術語ではなく、同時に言語にとって本質的なある力を示す概念であると論じる。この力は、言語使用の底で、言語と使用者を結合し、言語の存在そのものを支える非合理的な力である。病的な言語使用へと魅了し、かつ、健全な言語使用へと結合するこの働きを、本発表では「神話的魅力」と呼ぶ。

ところで、本発表のウィトゲンシュタイン解釈は、誤った言語使用（病）と正しい言語使用（健康）との境目の曖昧性を強調するものである。この議論はカヴェルの解釈と類似点を持つ。彼によれば、ウィトゲンシュタインは懐疑論（誤った言語使用）を論駁したのではなく、この哲学はむしろその超克の困難さを示している（『理性の要請』）。上で提示した解釈とカヴェルの解釈との異同を論じることで、本発表の考察が有する意義を一層明確化したい。

スピノザにおける「人間」の解釈史とその問題

佐々木晃也（大阪大学）

哲学における最大の問いを「人間とは何であるのか」としたカントの時代とは別の仕方で、いま再び「人間」が問われているように思われる。本発表では、スピノザにとっての人間ないしは人間の定義の問題に焦点を当てる。

マトゥロン（1978=2011 16）の言葉を借りれば、「スピノザは人間について語っており、ある意味では人間についてしか語っていない」。『エチカ』や『政治論』での人間学的記述は常に、すべての人間に妥当する「人間本性」概念に基づいて進められている。とはいえ経験的抽象による人間概念の採用は拒絶されており（E2p40sc1）、またそのような「あるがままの人間ではなく、そうあって欲しいと思うような人間」に基づいた倫理学は「風刺」に過ぎないと非難されている（TP1/1）。では、スピノザ自身にとっての人間、その記述が依拠しているところの人間概念とはどのようなものなのだろうか。『エチカ』冒頭の定義や備考などでは様々な概念の定義が与えられているが、人間概念のそれは与えられていない。

ドゥルーズ（e.g. 1981 chap.6）に倣って、スピノザにとっての人間を、種 *specie* としての存在でも性別 *sexualité* を有した存在でもなく、単に「触発し触発される能力」によって規定されるあれこれの個体として考えるだけでは十分ではない。この考えには確かに、人間存在を一つの実体とみなす哲学的伝統を覆したスピノザ哲学の一側面がよく反映されている。しかしながら、スピノザは事実、人間と他の動物種の間の本性上の差異（E3p57sc）や「男 *vir*」と「女 *femina*」の間の本性上の差異（TP11/4）があることを認めている。それゆえ朝倉（2012 67）の指摘があるように、「種」や「類」などの普遍概念としての「人間」と、性差を超えてすべての人間に適用される共通概念としての「人間」を区別して考える必要があり、ドゥルーズの解釈は後者について何も教えてくれない点で不十分である。そしてこの後者、スピノザにとっての「真の人間の定義」（E1p8sc2）とはどのようなものであるのか。

スピノザにおける人間の積極的定義（同じことだが人間本性についての十全な観念）の問題は、これまで様々に論じられてきた。解釈史上の最初の人々はゲルー（1974）であり、彼は「人間の本質」の十個の定義を割り出した。それ以後マトゥロン（1978）、ライス（1991）、ラモン（1995）らが続き、近年では『政治論』末部の性差別的記述の検討を踏まえた人間の定義の問題への合流も見られる（Sharp 2012; Gatens 2019）。本発表の目標は二つである。一つは、スピノザにおける「人間」についてのおよそ 50 年にわたる解釈史を辿りつつそれらのアーギュメントを再構成することであり、もう一つは、こうしたアーギュメントの再構成の中でその主要な解決を紹介すると同時にいまだ十分に検討されていない問題を明確化することである。

芸術論は「自覚」に何をもたらしたか
—『芸術と道徳』における芸術表現としての「自覚」捉え直しの意義

竹内彩也花（京都大学）

いかなる反省や言表にも先立つ「純粹経験」の事実から出立した西田哲学は、その経験をいかにして哲学的言語＝論理として語るができるかという根本的な問題を初めから内包していた。この問題は、「純粹経験」自体が自己反省の働きを含み、かつその働きが論理にまで達することが証明されたとき、はじめて解決される。西田の歩みにおいては、この働きは「自覚」として問い深められ、やがて「場所」の立場に至って深化された自覚が「場所の論理」の成立原理に達した。このような理解は広く共有されていると言ってよいだろう。

さて、西田は「場所」の立場に至る前、『自覚に於ける直観と反省』（1917年）で達した「絶対自由意志」を原理とする自覚の立場から、『意識の問題』（1920年）、『芸術と道徳』（1923年）の2冊の論集を著した。これらの中で西田は、K・フィードラーやディルタイらの議論を吸収しながら、自覚という事態のいわば「範例」として芸術表現（制作）を論じている。ここである程度まとまって展開された芸術論に、植田寿蔵や木村素衛が大きな影響を受けたこともあり、初期の西田の芸術論を取り出そうとする美学・芸術学的関心からは重要視されるテキストである。他方、哲学の方法論的関心のもとでは、「絶対自由意志」の立場自体の寿命の短さと、著作の応用的性格のためか、ほとんど注意を払われて来なかった。

しかし、「絶対自由意志」の自覚の立場から芸術を論じたことは、単なる応用にはとどまらず、むしろ自覚の内実をも変容させていたのではないか。特に自覚の主導的原理が「働くもの」から「見るもの」へ移行していく過程や、この方法が論理的表現を含みこんでいく過程を考える際に見逃すことのできない契機のいくつかは、この時期の芸術論を出どころとしているように思われる。そこでは芸術制作の方が、哲学の方法を導く「範例」の役割を果たしたのではないか。

本発表では2つの問いから、西田哲学の「自覚」の方法論の発展において、芸術論が果たした意義を評価したい。まず、①芸術論への適用によって自覚は、どのような側面・位相を獲得、ないし明確化したのか。②それらはいかに「場所の論理」の成立につらなる重要な論点に結びついているか。検討にあたって、自覚と芸術制作を結びつけつつ、そこに新たな位相を呼び込んだ要として「表現」の概念に注目する。表現はもともと自覚をある角度から見たものであるが、この意味での表現が、フィードラーらの受容を通じ、芸術表現や言語認識と交差させられたことが、自覚の変容において重要と思われるからである。

以上を通じて、言語を絶した直観の面を強調されがちな西田の方法論の「表現」の側面を主題化し、特にそれが「形」を持つことに光を当てる。後期には「形」は論理の意義を定

める重要概念となるが、この概念が芸術における形像 **Bild** や象徴的言語などと交差する所から萌芽していることを確認したい。

和辻哲郎の風土概念に対する「旅行者」の意義

田島淳之介（関西学院大学）

本研究は、和辻哲郎が『風土』にて取り上げた「風土」概念における「旅行者」という契機が持ちうる役割について考察するものである。「風土」とは、和辻倫理学における現象学的な「人間の自己了解の仕方」（全集 8 巻 13 頁）である。そしてその中で着目すべきものに「旅行者」の視点がある。それは、自分の故郷から離れて異郷の風土とであることにより、「風土」を把握する客観的視点を持った人間であるという意義を持っている。和辻の著書『風土』は、著者自身が実際にヨーロッパへ洋行したときの見聞によって成り立っているため、『風土』それ自体が「旅行者」視点の書と言っても過言ではない。しかしながら、「風土」と「旅行者」の間にはある問題がある。それは、本来「旅行者」は「風土」の把握（それは同時に人間存在の把握をも意味する）の客観性を担保する存在であるのだが、そのために、「風土」を観察する人間が即ち「旅行者」であると解してしまうと、個人であると同時に「人々の結合あるいは共同態としての社会」（全集 8 巻 15 頁）をも意味する「人間」つまり「風土」の主体である人間はすべて「旅行者」であるという結論に至りかねない問題である。仮に「風土」において自己了解する人間がすべて「旅行者」であると規定してしまうと、「共同態」として風土に根ざしている人間存在の契機と矛盾してしまうのではないか。そこで本研究では「旅行者」という人間存在の特徴について整理し、「旅行者」が「風土」の客観性をどこまで担保しうるのかを考察していく。本研究の目指すところは、「旅行者」という人間存在の特徴の領域を明確にし、「風土」の理論と和辻が定めた「人間」の概念が両立することを確認することにある。「モンスーン」「砂漠」「牧場」といった諸類型について『風土』で論じられているが、そこで述べられているような人間存在の在り方を捉える構図が成り立つためには、その風土の観察者としての「旅行者」が同時に、風土における生活を実践する「共同態」としての人間でもあることが求められる。和辻風土論においては以上のように「旅行者」としての人間存在の領分を見極めることが焦点となる。

ハイデガーはなぜ言葉の多義性を重視するのか——四義性 (Vierdeutigkeit) ・ 不可思議な
促し (Ratsal) ・ 時間の第四次元 (die vierte Dimension der Zeit)

貫井隆 (日本学術振興会特別研究員)

M・ハイデガーの後期思想において、ハイデガーが言葉の「一義性」を批判し、詩作的な言葉の本質として「多義性」を重視したことは周知のことである。しかし、その事実に比して、ハイデガーにとってなぜ言葉の多義性が重要であるのかということについては、生前刊行された文献内での言及の寡少さもあり、必ずしも明確ではない。本発表は、主に近年刊行されたハイデガーの遺稿 (特に 1940 年代後半から 1950 年代前半にかけてのもの (GA91, 97, 98, 99, 100 等)) に基づき、なぜハイデガーが言葉の多義性を重視したのかを、後期思想の鍵概念である「四方域」と関連させて明らかにする。

生前刊行された文献内でハイデガーが多義性について語る場合、次の二つのことが言われる。それは、「詩が表現すべきこと」は一義的でなく、多義的であるということ (GA53, 130)、その多義性は、互いにばらばらになってしまうのではなく、一つの「固有の領域」を持つ、言わば、有限な統一性を持つということである (cf. GA8, 75; GA12, 70-71)。刊行物の記述を追うかぎり、言葉の多義性についてこれ以上の説明はなく、多義性と後期の鍵概念である「四方域」との関係も明瞭であるとは言えない。

しかし、近年刊行された遺稿では、言葉の多義性と四方域の関係が豊富に語られている。特に両者を関係づけるのが、ハイデガーの用いる「四義性 (Vierdeutigkeit)」や「世界意義性 (Weltdeutigkeit)」という概念である。遺稿によれば「多義性」は本来、「四義性」として捉えられるべきである (cf. GA99, 107; GA97, 486-487)。ここで四義性あるいは世界意義性は、〈四・世界へ向かうように指し示すこと (Deuten)〉という意味で用いられている (cf. GA91, 700)。すなわち、多義性＝四義性とは、言葉において、「物」が四方域へと本質的に連関する様をあらわす。

ただし、この「四」としての「多」は、「性起の出来事」における「一にすること」がそうであるように、「数えられるものではなく」 (GA99, 57)、あるいは「量的なものではない」 (GA97, 307) (cf. GA4, 170, GA99, 32)。この「四」や「多」はある種の「組み尽くせなさ」を意味するからである (GA70, 166)。また、「四義性」＝「多義性」は、「不可思議な促しの語られないもの」でもあるとされ (GA99, 107)、これは後期思想の時間概念とも関わる。「時間の第四の次元」と呼ばれる事柄が、この「語られないもの」の内にもたらされるべきとされるからである (GA99, 23)。

以上の一見謎めいたハイデガーの記述の内実を解明することにより、本発表は最終的に、なぜハイデガーにとって他ならぬ言葉が、「存在の家」となる資格を持つのか、という問いにも寄与することを目指す。

カントは有徳な無神論を可能と見なしたか？

福田喜一郎

17/18世紀の欧州の思想界において、神の存在や来世を信じていない人が有徳な人生を送りうるか、という問題が提起されていた。それはたいていスピノザの人生が言及されながら「有徳な無神論 (tugendhafter Atheismus)」の問題と称されている。

カントは実践理性の自律思想もしくは意志の自己規定説を展開してからでさえも、終生この問題についてその不可能性を示唆している (『実践理性批判』 V122-3、『判断力批判』 V452: 数字はアカデミー版の巻数とページ数)。これは、最高善に関する道徳神学的課題と道徳の基礎づけの課題との関係をいかに考えるか、という問題についての見解となる。その一方で彼は、道徳は必然的に宗教へと至ると主張しながらも、実践理性は道徳法則以外のいかなる動機も必要とせず意志を自己規定できるという見解を、『単なる理性の限界内の宗教』(1793年)と『人倫の形而上学』(1797年)に至ってもはっきりと提示している。

カントは終生、人間は誠実に行為したあとで何が結果するかに関して無関心ではられないのだから、結果を度外視するような生には、道徳性において限界があると考え続けた。これは、神の存在と来世を信じなければ、事実問題として誠実に生きることは困難だということだ。ここで、カントにおける来世信仰の意味が『実践理性批判』(1788年)におけるものと異なってきているのがわかる。そこでは、不死なる魂が来世において道徳的純粋性(道徳法則との完全な結合)をめざして永遠に努力しうることが希望できる、というものであった。この宗教思想は、『人倫の形而上学の基礎づけ』(1785年)において「善なる意志」を「聖なる意志」として超越的な概念と見なしたときに、すでに準備されていた道徳的理念でもある。すなわち来世信仰において、道徳的な罪人が義とされるための努力への希望が示された。その一方で、有徳な無神論者の不可能性を示唆するカントにおける来世(および神の存在)は、不正に喘ぎながらも誠実に生きる人間に、生の意味と目的を確信させるために不可欠なものとなっている。

来世と言えば、極楽と地獄が連想されることが多いが、そうした特定の宗教的信仰におけるものだけでなく、カントのように来世信仰が現世に対して与えるその普遍的な意味を問うべきであろう。それは敷衍して言えば、生の意味と目的に関して、最終決定権を全面的に現世に委ねてよいのかどうか、という問題である。有徳な無神論を不可能と見なすカントは、これを否定していることになる。そして、来世と神の存在の信仰は「願望的思考 (wishful thinking)」なのではなく、カントによれば、実践理性がもつばら理性の限界内で(独力で)命じているものである。

プラトン『ポリティコス』291d-303bにおける法律批判について

藤井宏（神戸大学）

本発表の目的は、プラトン『ポリティコス』における法律批判の議論を検討することである。

『ポリティコス』後半部においてエレアからの客人は国制の分類を行うが、その際、国制の当否は支配者が政治的知識・技術を有しているか否かという条件によって決定されると述べられる(292e)。すなわち、政治的知識・技術をそなえた支配者が自身の知識・技術を活用しつつ国家をより良いものにするよう努めてさえいれば国制は正当なものであると主張されるのである。その際、支配者と被支配者とのあいだの合意の有無や法律の有無は国制の当否とは無関係である。このような主張にたいして対話相手の若いソクラテスは法律を用いない支配の正当性に疑念を呈する(293e)。この疑念を契機として、法律による支配の正当性の検討が議論の主題となる。

当該箇所における解釈上の争点は、エレアからの客人が法律による支配にどのような評価を与えているのかという点である。エレアからの客人は、一方では法律の限界を指摘したうえで、政治的知識・技術を備えた支配者の法律にたいする優位性を強調し、最善の国制においては法律が必要ないことを示唆する(294a-297b)。しかし他方で、いくつかの条件を付したうえで法律や立法術に肯定的な評価を与えているようにも見える(300a-303b)。このような、一見すると相反する法律への評価にたいして整合的な解釈を提示することが長らく解釈上の課題であった。

従来解釈では、法律による支配は政治的知識・技術をそなえた支配者による理想的な統治と比較すれば劣るものの、肯定的な意味を持つとみなされてきた。すなわち、法律は、政治的知識・技術をもたない人々によって制定されている点で完璧に正当なものではないものの一定の価値がある。

それに対して近年提起された解釈では、法律による支配は積極的な意味を持たず、まったく推奨されていないとみなされている。すなわち、政治的知識・技術をそなえた理想的な支配者が不在である社会では、人々は法律を変えることなく固持しそれらを遵守することで最善の国制を模倣しているにすぎない。

本発表では、以上の問題を考察し、エレアからの客人が法律による支配に否定的であることを示す。結論としては、政治的知識・技術をもたない多数者が制定した法律による支配は、理想的な支配者による統治という最善の国制を模倣することができないという立場を提示する。

フィヒテ『知識学の概念』における「循環」と「円環」の差異について

嘉目道人（大阪大学）

フィヒテの初期の著作『知識学の概念』（以下、『概念』）は、『エーネジデムス』やマイモンによって批判哲学に向けられた懐疑への応答の書であるとともに、イエーナ大学への着任に際しての自己紹介の書でもある。そうした経緯から、『概念』では、知識学とは何でありなぜ必要であるのかが、フィヒテにしては平易な文体で、しかしきわめて論理的に述べられている。本発表は、『概念』における主要な論点のうち、「循環 *Kreislauf*」と「円環 *Zirkel*」の関係について、若干の考察を試みるものである。

『概念』と、それに続く『全知識学の基礎』の冒頭においては、いくつかの「循環 *Zirkel*」が主題となっている。それらは少なくとも三つの循環に区別できる(木村 1937, 長澤 1978 参照)が、中でも本発表が着目するのは、「人間精神が決して脱出できない循環」(GA I/2, 133)とフィヒテが呼ぶ循環である。

私見によれば、この循環は、「人間的知識の中には唯一の体系が存在すべきである」(ebd.)という出発点から、あらかじめ原則として仮定された「命題 X」が実際に知識学の原則であることを突き止め、今度はそこから「その上に基づく体系は人間的知識のかの唯一の体系である」(ebd.)という結論を導くという構造になっている。これは、原則が唯一の体系を基礎づけ、唯一の体系が原則を基礎づけるという関係になっている点で循環である(長澤 1978, 117 頁参照)。また、この一連の行路は、知識学の叙述が常に経験から原則への上昇と、原則から経験への下降の二系列から成るといふ事情とも符合する。

ところで、知識学そのものは全体として「円環 *Kreislauf*」構造ないし運動をなすこともよく知られており、『概念』においても、3つの「循環」が論じられる箇所近接して、円環について述べられている箇所がある。そして、円環の場合には、知識学の原則が出発点であり、そこから導出されうるすべての命題が汲みつくされたのちに、再び原則へと還帰することで円環が完成するとされる。この円環こそ、学が絶対的総体性をもつものとして完成する唯一の道である(vgl. GA I/2, 131 Anm.)。

さて、以上のことからすると、一見同じような話に思える「循環」と「円環」とでは、実は行路が全く正反対であることが明らかになる。これは、出発点の違いであると言える。つまり、循環の場合はいわば当為としての事実が出発点であるのに対して、円環の場合は原則ないし根拠が出発点である。あるいはまた、観点の違いとも言える。

この違いをどのように理解すべきか、というのが本発表の主題である。

若杉直人（立命館大学）

ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille, 1897-1962) は、フランスの思想家、作家である。彼の思想は、哲学、文学、文化人類学、心理学といった様々な領域に跨るものであるが、その根底には「いかにして死を体験するか」という問題が存在する。ラ・ロシュフーコーの「太陽と死は直視できない」という箴言がある通り、人間は死を体験することはできない。しかしながら、バタイユ思想のキータームである「内的体験 (l'expérience intérieure)」とは、ある意味で「死の体験」と言い換えることができ、彼はこの体験を追い求めるべく、主著『内的体験』の中で議論を展開している。

ところで先行研究にあつては、バタイユの内的体験がいかなるものであるのか、いかなる効果をもたらすものであるのかといった、体験の内実について取り上げるものが多い。しかし、そもそもこの体験は「死」という人間理性の領域外に属する体験である以上、体験の内実を語るには矛盾したレトリックを用いる必要があり、この点にバタイユ思想を哲学の領域で語ることの難しさがある。それに対して、彼は内的体験に至るための方法についての記述も残しているが、これはデカルトやヘーゲル、ニーチェといった主流の哲学史を踏まえたものであり、この方法については哲学という領域で論じる価値は十分にあると思われる。そこで本発表では、バタイユの「内的体験」そのものについて論じることはせず、その体験に至る上で彼が採った方法に着目することとする。発表者のこのような態度は、カントが『純粹理性批判』において物自体と現象の間に設定した境界線をバタイユ思想においても設定するようなものである。

さて、バタイユが体験に至るために採った方法であるが、これを彼は「演劇化 (dramatisation)」と呼んでいる。『内的体験』においては、百刻みの刑に処される中国人の写真を凝視し、その写真に写る「死」を模倣するという方法を演劇化と定義している。しかし、その後の著作『ニーチェについて』においては「好運」という偶然によって体験に至るといった記述がされており、「演劇化」という能動的な方法論は後退しているかのようと思われる。この『ニーチェについて』は、書物としての体裁を欠いているものであり、多くがニーチェ、あるいはニーチェに関する文献からの引用で成り立っている。そこでこの事実を踏まえ、本発表においては、『ニーチェについて』の中でバタイユはニーチェという人物（あるいはテキスト）を模倣するという「演劇化」を行っているという新たなバタイユ解釈を提示する。そして、『内的体験』から『ニーチェについて』にかけて、体験に至るための手段が「演劇化」から「好運」へと移行しているという従来の解釈を刷新し、この二つのテキストには「演劇化」という概念が通底していることを明らかにする。